

[17]韓国研究センター年報

<https://hdl.handle.net/2324/2004987>

出版情報：韓国研究センター年報. 17, 2017-03-31. Research Center for Korean Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

韓国研究センター客員教授紹介

第40代 鄭鎮星

(ソウル大学校 社会学科 教授)



任期：2016年5月10日～2016年9月23日

専門は、人権・女性政策。社会学博士。

ソウル大学校社会学科卒業後、シカゴ大学大学院社会学科にて博士号を取得。徳成女子大学校社会学科副教授を経て、1996年からソウル大学校社会学科教授。ハーバード大学国際問題研究所招聘研究員、東京大学社会科学研究所招聘教授、韓国女性学会会長、社会学会会長などを歴任。

本センター客員教授に在任中は、「韓国社会における人権：変化の過程とその要因」や「Marriage migration in Korea」と題する研究発表を行うなど、精力的に活動された。

第41代 韓斗鳳

(高麗大学校 食料資源経済学科 教授)



任期：2016年12月20日～2017年3月2日

専門は、国際食糧政策、農業経済学。農業経済学博士。

高麗大学校農業経済学科卒業後、テキサスA & M大学・農業経済学科にて博士号を取得。韓国農村経済研究院副研究委員を経て、1994年から高麗大学校食品資源経済学科教授。韓国農業経済政策学会会長、韓国農業経済学会会長などを歴任。

本センター客員教授に在任中は、「Policy Impacts and Determinants of Food Loss and Waste in Korea」と題する研究発表を行うなど、日韓の農業政策改革を中心に研究された。

2016年韓国前近代史若手研究者セミナー

日 時：2016年8月27日～30日

場 所：グローバルアリーナ（福岡県宗像市）

共 催：韓国国際交流財団

韓国研究センターは今夏、日韓両国における前近代の韓国史を専攻する次世代の研究者の発掘と相互交流、およびネットワーク形成を目的として2016年8月27日～30日に「2016年韓国前近代史若手研究者セミナー」を開催した。年来、前近代の韓国史を専攻する有志によって整備されてきた若手研究者のネットワークが存在していたものの、日本史や東洋史などの近接分野には情報が十分にはいきわたっておらず、関係の大学院生・若手研究者は各処に分散して孤立的に活動し、必ずしも十分な専門的訓練を受けられない場合すら多い。本セミナーは、このような状況を打開し、古代から朝鮮王朝に至る歴史学を専攻する日韓大学院生の学術交流や日本国内での前近代韓国史研究の活性化を図る意図でもって催行された。



永島副センター長
による開会の辞



韓国国際交流財団
崔賢善部長

福岡県宗像市グローバルアリーナを会場にして開催された本セミナーには、日本国内の各大学から前近代の韓国史および日韓関係を専攻する大学院生（学部生を含む）21名、韓国からは高麗大学校・全南大学校および韓国学中央研究院・韓国学大学院から8名の大学院生を含む計29名の学生が、加えて日本側からも第一線で活躍している韓国史専門家と若手研究者を含め総勢42名が本セミナーに参加し、3泊4日の日程で寝食を共にした。

セミナーの内容としては、まず8名（日本側参加者5名・韓国側参加者3名）による研究発表と討



開会式の全体写真

論を主軸としつつ、古文書学や木簡の研究法といった専門的な講義を実施した。研究発表では、古代・高麗・朝鮮・日韓関係の各時代からの報告をそれぞれ実施し、発表ごとに2～3人の討論者による質疑・コメントが割り当てられた。また、日韓交流史において地理的にも学術的にも重要な宗像大社が所蔵する文化財を実地に訪ねるなど、セミナーの内容は多岐にわたるものであった。

なお、セミナー後に実施したアンケート調査や参加記からは、セミナーに対する参加者の満足度の高さが窺われた。特に、参加者のほぼ全員が日韓両国の研究者と交流を深めることができたという感想を記している。また、互いに連絡先を交換して実際に研究に関する連絡を取り合うなどしており、未来志向のネットワーク形成という本セミナーの目的はほぼ達成することができたと自負している。

特に、28日の午後実施された専門時代別の自由討論が好評を得た。分野別の専門家が日韓の若手研究者が抱えている研究上の悩みや疑問に積極的に答え、たがいに考えを述べ合うことで、同じ時代を専攻する研究者間の交流促進に少なからぬ相乗の効果をもたらしたといえる。

また、ほぼ全員の参加者が次回のセミナー開催と参加希望を明らかにしている。発表や討論を通して



中野韓国研究センター長
による閉会の辞

参加者の研究意欲を促進することができた点も評価することができよう。これは、参加者全員が発表もしくは討論に参加することによって積極的

にセミナーに参加したためであったと考えられる。

実施場所、発表・討論の時間配分や逐語通訳による時間の切迫など運営面で改善すべき点は多々あるものの、所期の目的は達成できたといささかの自賛は許されよう。本センターは、学内外の研究者との研究会や各種ワークショップの開催を通じて、今後とも次世代の若手研究者の育成と、研究者間のネットワークの形成に注力していきたい。

【日程】

○第1日

15：30～17：30 【開会式】

- 1.開会の辞：永島広紀
(韓国研究センター副センター長)
- 2.祝辞：崔賢善（韓国国際交流財団戦略経営室企画予算チーム部長）
- 3.セミナー趣旨説明
- 4.開催記念講演
講師：六反田豊
(東京大学大学院人文社会系研究科教授)
題目：「韓国前近代史研究の課題」

17：45～18：30 【ガイダンス】

- 1.セミナースケジュール案内
- 2.参加者自己紹介

○第2日

9：00～12：00 全体発表

13：30～14：30 全体セミナー

- 講師：川西裕也
(新潟大学大学院現代社会文化研究科助教)
題目：「朝鮮時代古文書研究法」

14：45～15：45

- 講師：橋本 繁（早稲田大学ほか非常勤講師）
題目：「韓国古代木簡研究法」

16：15～17：45 分野別フリー質問

○第3日

9：00～ 全体発表

13：30～ 現地研修<<宗像大社（神宝館）>>

○第4日

9：30～10：30 【閉会式】

- 1.閉会の辞：中野 等（韓国研究センター長）
- 2.韓国側代表者挨拶
- 3.全体記念写真撮影

11：00 解散



六反田豊教授（東京大学）による基調講演



川西裕也氏による講義



橋本繁氏による講義



宗像神社にて



全体発表のようす



分野別質疑応答のようす

本セミナーでは、参加者が古代・高麗・朝鮮の各時代と日韓関係の計4つの分野に分かれ、各分野の専門家との質疑応答が行われた。



【参加記】

東アジア日本研究者協議会・第1回国際学術会議

永島広紀 韓国研究センター副センター長

日 時 : 2016年11月30日~12月1日

場 所 : 韓国/仁川広域市・松島コンベンシア

2016年11月30日から12月1日にかけて、仁川広域市の新市街内に建設された「松島コンベンシア」を会場として開催された東アジア日本研究者協議会の第1回国際学術会議において設定された「共同パネル」および「次世代パネル」に九州大学韓国研究センターのメンバー、ならびに大学院生がエントリーを行い、パネルセッション形式による研究報告に臨んだ。九州大学からの参加者（敬称略）は、中野等（韓国研究センター長）・永島広紀（同・副センター長）・伊藤幸司（センター委員）、および大学院比較社会文化学府博士後期課程の武藤優であった。

同協議会は以下にみる通り、中国・台湾・韓国に加え日本の「日本研究」を主導している諸機関の関係者が発起した国際的な研究協議会であり、今回、その第一回目の学術会議が開催される運びとなった。

徐一平（北京外国語大学北京日本学研究中心長）

小松和彦（国際日本文化研究センター長）

徐興慶（国立台湾大学日本研究センター長）

李康民（漢陽大学校日本学国際比較研究所長）

朴喆熙（ソウル大学校国際大学院院長）

なお、協議会の設立趣旨（本文末尾に同会ホームページ：<http://www.eacjs.org>より参考として転載）にもあるように、日本を含む東アジア諸国において国際的、かつ学際的な「日本研究」の需要は高まり、かつ研究テーマも歴史・経済・政治から現代のポップカルチャーに至るまで多岐に亘っているものの、それらを束ねる国際的な組織はこれまで存在しなかったことが、その発起にあたっての大きな理由として挙げられている。本学

の韓国研究センターは狭義の「日本研究」を行う機関ではないものの、日本において韓国研究を行い、また日韓関係にまつわる共同研究を行ってきていることから、台湾大学日本研究センター長（九大OB）である徐興慶教授の強い懇請と斡旋によって、今回、参加の運びとなった。

結果、以下に列記する4カ国の諸機関・組織が一所に会同することとなった。

（韓国）韓国現代日本学会、韓国日本学会、高麗大学校グローバル日本研究院、国民大学校日本学研究所、世宗研究所、ソウル大学校日本研究所、東西大学校日本研究所

（台湾）玄奘大学応用外語学系所、国立台中科技大学語文学院日本研究センター、国立台湾大学日本研究センター、淡江大学村上春樹研究センター、南栄科技大学応用日本語学科、輔仁大学外語学院日本研究センター

（中国）広東外語外貿大学東亜研究センター、華東政法大学法律史研究センター、中国海洋大学日本研究センター、東華大学外語学院、南開大学

（日本）大阪大学、お茶の水女子大学ジェンダー研究所、関西大学東西学術研究所、九州大学韓国研究センター、京都大学地域研究統合情報センター、慶応義塾大学「日本型民主主義の歴史的構造分析」プロジェクト、神戸大学国際連携推進機構、神戸大学人文学研究科、国際日本文化研究センター、（在日）韓国人研究者フォーラム、関口グローバル研究会、東京外国語大学国際日本研究センター、東京大学社会科学研究所、東京大学先端科学技術研究センター、東北大学国際文化研究科、二松学舎大学、日本思想史学会、東アジア史日本研究フォーラム、未来人力研究院・渥美国際交流財団SGRA

協議会全体としてはまず初日に企画パネルとして「東アジア日本研究者協議会の構築の意味とビジョン」と題するパネルディスカッションが行われ、また2日目の掉尾を文化人類学者として著名な青木保氏（国立新美術館長）による特別講演で飾っていた。

さて、本センターのメンバーは12月1日（木）の9:00から10:30にかけて、パネル名としては「B-2 東アジア史研究における日本史料の利用をめぐる再検討」と題したセッションに臨んだ。司会は中野等（九州大学）が務め、以下の2本の研究報告と指定討論者との質疑、およびフロアからの質問を受ける形で進行した。



伊藤報告

報告者1：伊藤幸司（九州大学）「東アジア交流史史料としての入明記のポテンシャル」

討論者1：金時徳（ソウル大学校）

報告者2：永島広紀（九州大学）「蘇峰・徳富猪一郎による朝鮮史料の収集とその史学史的位相」

討論者2：鄭駿永（ソウル大学校）

本パネルは、とりわけ前近代史研究においては、いわゆる「正史」「実録」といった官撰史料にその多くを依拠せざるを得ない東アジア史研究において、官製以外の史料も多い日本側史料の残存のあり方、あるいは修史事業や編年記録の作成に関する近年の動向について報告（前近代：伊藤幸司／近現代：永島広紀）をそれぞれ行った。とりわけ、伊藤報告は『入明記』の有する東アジア海域史研究上の高い価値に注目して、その利用におけるポテンシャルについて図像を交えた詳細な報告がな



永島報告

され、フロアからも質疑が相次いだ。また永島報告は、徳富蘇峰の代表的な著作である『近世日本国民史』の中でもその白眉とも言える「文禄・慶長の役」にまつわる巻の内容やその編纂の背景を近代日本の「修史事業」との関連から読み解こうとした内容であった。

また、若手研究者の養成を目論む企画として「次世代パネル」が設置され、事前の審査によって選りすぐられた報告がなされた。その中であって武藤報告は、「1930-1945日本内地の劇場公演作品と朝鮮・舞踊公演作品を中心に」と題した密度の濃い研究発表を行い、また画像資料を効果的に利用することによって聴衆からの高い関心を呼んでいた。

【参考】 東アジアでは、日本に関する多様な分野における研究が蓄積されてきました。様々な地域において、幅広い分野にわたり、日本研究者が活動をしています。一方、北米を中心としたAAS（アジア学会）、欧州を中心としたEAJS（欧州日本学会）は、国境を越えた様々な日本研究関連の学術および人的交流を活発に行ってきました。しかし、東アジアにおける日本研究者の中には、言語などの問題でこれ



武藤報告

らの学会への出席が困難であった研究者もいます。他方、東アジア地域にはたくさんの日本研究者が活動しているにもかかわらず、これらの学会と比較できるほどの国際的な学術交流があまり行われていません。個人あるいはグループ単位での交流は行われていますが、東アジアの日本研究者が一堂に会して交流しあえる場はまだ作られていません。

その原因としてはまず、歴史的に冷戦という大きな壁がありました。実質的に東アジアにおける人的、そして学術交流が急激に増えたのは1990年代以降だと言えます。しかし、その後も東アジアにおける政治的な対立と軋轢は、日本専門家の自由な交流を制限しました。また、他の観点から見ると、東アジアには自国内に巨大な日本研究者集団がそれぞれ形成されており、国境を越えた研究交流を積極的に行う必要性を妨げました。

しかし、今は東アジアにおいても、国境を越えた日本研究者の学術的な交流がより積極的に行われなければなりません。そのため、数年前から韓国をはじめ、東アジアの日本研究機関を中心に「東アジア日本研究者協議会」（以下協議会）を発足させるため、協議を重ねてきました。

その趣旨として第一に、日本研究の質的な向上が挙げられます。東アジアでは日本研究が行われていますが、例えば韓国の場合、人文学と社会学との間の融合研究は限られており、これは日本研究の発展を阻害しています。既存の学風を維持しつつも、協議会の交流を通じて、学際的研究の基盤を形成しようとしています。第二は、自国中心の日本研究から脱し、より多様な観点からの日本研究を志向するためです。第三は、東アジアの安定と平和に寄与するためです。国益の追求という現実と、相手に対する客観的な理解を調和させ、研究者としてより安定的な東アジアとの関係形成に貢献できると思います。以上のような理由とは別に、東アジアの日本研究者が一緒に集まって真剣に討論しあい、交流をすること、それ自体にも意味があるはずです。協議会は将来東アジア地域を網羅する学会の設立を前提にしたものです。

以上のような趣旨をもって現在、ソウル大学日本研究所は東アジアの日本研究機関とともに、協議会

設立に向けて準備を進めています。協議会が構成できれば、毎年、東アジアの主要都市をまわりながら、年1回の国際学術会議を開催しようと考えています。協議会の発足に向けて関連機関は今年、仁川で「東アジア日本研究者協議会・第1回国際学術会議」（以下、第1回国際会議）の開催を準備しています。そして、今回の第1回国際会議はソウル大学日本研究所が執行を担当することになりました。協議会が順調に運営されるようになれば、毎年、他の学会や研究機関が順次執行を担当することになります。

協議会は東アジアの多様な分野における日本専門家が、知識を共有できる貴重な場となるはずですが、第1回国際会議の開催を成功させるためには、日本研究関連の学会と関連機関の積極的な参加と協力が必要です。第1回国際会議の内容は、今後具体的な協議を通じて決定されますが、大会準備のために次のような企画案を用意しましたので、積極的なご協力をお願い申し上げます。

【参加記】

第12回世界韓国研究 コンソーシアム・ワークショップ

九州大学人文科学府博士後期課程 高村源太郎

日 時：2016年6月24日～25日

場 所：ソウル大学校国際大学院国際会議室

主 管：ソウル大学校国際大学院 仝淸韓国学センター

奎章閣国際韓国学センター

後 援：韓国学中央研究院

今年で12回目となる世界韓国研究コンソーシアムのワークショップが韓国・ソウル大学で開催され、報告者は九州大学の大学院生の発表者として参加した。今回のワークショップには、世界各国の大学教授と、韓国・アメリカ・中国・ロシア・イギリス・オランダ・ドイツ・オーストラリア・チリ・タイ・フィリピンなどの数多くの国々で韓国学を研究している大学院生及び若手研究者が参加した。研究発表は、韓国文学・社会科学・朝鮮王朝・近代史・北朝鮮の五つのセッションに分かれて行われ、各発表には該当分野を研究する教授からの論評やフロアとの質疑応答が行われた。発表に対する論評は、発表内容に対する個別具体的な史料解釈及び説明方法から、プレゼンテーションにおける注意点や今後の研究の方向性に至るまで広範囲に及び、発表者の研究に対する実践的な助言になっていたと思える。報告者は2日目午前のセッション3（朝鮮王朝）において「訴訟でみた19世紀軍役賦課の諸相－奎章閣『古文書』の所志類を対象に－」という題名で発表し、ハーバード大学の김선주先生にコメントして頂き、多くの教授を受けた。また、発表後の質疑応答や会食時にも、



発表の改善点を含めて今後の研究に対する指摘を諸先生方から頂くことができ、これらを糧に自身の研究を修正しつつ、進展させたいと思う。

本ワークショップでは世界各国の大学院生の発表を聴くことができ、韓国に関する多様な研究が世界的に進行していることを知ることができた。韓国史学についても、アメリカや中国で研究している大学院生の発表を聞くことができ、各国の研究状況の一端をうかがうことができた。発表内容には、発表者個人の問題関心に基づく部分を無視することはできないが、それぞれの国家における韓国に対する関心や韓国との関係性による影響も、それなりに反映されているのではないかと思える部分もあった。それらを検討してみることで、韓国学のみならず、世界における韓国の位置づけを知ることにもつながるのではないかと思われる。また、発表時間以外にも、互いの国家における韓国学の現況や研究方法、また相互の発表に対する具体的な意見などを交換することもでき、若手研究者としての研究姿勢など、大いに刺激を受けた。

また、今回は英語による発表が大半を占めたが、質疑応答において議論の対象になったことの一つに、各学問において使用される学術的な用語を韓国学においてどのように適用し、また個別の史料に登場する用語をどのように概念化するのが適切であるか、というものがあつた。これは、韓国において発見された諸事例を、既存の理論体系の中でどのように説明すべきであるか、または説明できるかという趣旨からなされたものであると思われる。韓国学は、韓国という一つの特殊な地域を理解するための

学問ではあるが、文学・歴史学・政治学など各学問の枠組みの中で使用される一般的な理論や概念の適用の是非に関する議論を避けて通ることはできない。韓国史においても、韓国固有の諸事象を韓国の歴史的展開過程の中で説明しつつも、どのように一般的な理論を構築するのかは、今尚大きな課題となっている。これは研究過程においては基礎的な部分に属するが、韓国学の世界的な展開を展望する上でも、非常に重要ではないかと思われる。このような問題が研究発表の場においても議論の対象になったことで、同様の課題を各研究者間で共有していることや、それが容易に解決で

きる問題でないことを確認することができ、一研究者として今後の研究を進める上でも、それなりの勇気と意欲を得ることができる機会になったと感じた。

最後に今回のワークショップは、報告者が高麗大学に留学中ということもあり、参加することになった。世界的な韓国学の発表の場に参加する機会を与えてくださった高麗大学の최덕수先生と김형근氏、急な参加にも対応して頂いたソウル大学の先生方と担当者の方々、参加を認めて頂いた九州大学に、感謝の言葉を捧げたい。

【日程】

○2016年6月24日（金）

9 : 30 ~ 10 : 00 Opening Ceremony

10 : 00 ~ 10 : 30

Congratulatory address

10 : 30 ~ 11 : 20

Keynote Speech by Prof. Eun Ki-Soo

11 : 30 ~ 13 : 00

Director's Meeting Luncheon

13 : 00 ~ 15 : 00

Presentation Session 1 <Korean literature>

Chair : Prof. Charlotte Horlyck (University of London)

Presenters : 1) Orion Lethbridge (Australia National University)

2) Allan C Simpson (University of London)

3) Sebastian Lamp (University of London)

Commentators : 1) Prof. Fulton Bruce (The University of British Columbia)

2) Prof. Min Wonjung (Pontificia Universidad Catolica de Chile)

15 : 00 ~ 15 : 30 Coffee break

15 : 30 ~ 17 : 30

Presentation Session 2 <Social science>

Chair : Prof. Sem Vermeersch (Kyujanggak Institute, SNU)

Presenters : 1) Park Yong Sun (University of Southern California)

2) Matthew Lauer (UCLA)

3) Cai Wenjiao (Harvard University)

4) Aihua Li (Leiden University)

Commentators : 1) Prof. Eun Ki-Soo (Seoul National University)

2) Prof. Park Young-A (University of Hawai'i at Manoa)

○2016年6月25日（土）

9 : 30 ~ 11 : 30

Presentation Session 3 <Joseon dynasty>

Chair : Prof. Choi Deoksoo (Korea University)

Presenters : 1) Liu Chang (Peking University)

2) Gentaro Takamura (Kyushu University)

3) Kim HyoungKun (Korea University)

- Commentators : 1) Prof. Kim Sun Joo
(Harvard University)
2) Prof. Xing Liju (Fudan
University)
3) Prof. Remco Breuker
(Leiden University)

11 : 30~12 : 30 Luncheon

12 : 30~15 : 00

Presentation Session 4 <Modern History>
Chair : Prof. Han JeongHun (Seoul
National University)

- Presenters : 1) K a m o n B u t s a b a n
(Chulalongkorn University)
2) Shim Suhan (The University
of British Columbia)
3) Gabriel Dae-In Lux (Freie
Universitat Berlin)
4) Catalina Labra A. (Pontificia
Universidad Catolica de
Chile)
5) Benjamin A. Engel (Seoul
National University)
6) Prof. Oliver John C. Quintana
(Ateneo de Manila University)

Commentators : 1) Prof. Lee Namhee (UCLA)
2) Prof. Lee Eun Jeung
(Freie Universitat Berlin)

15 : 00~15 : 30 Coffee break

15 : 30~17 : 30

Presentation Session 5 <North Korea>

- Presenters : 1) Kim Dong chan (Fudan
University)
2) Robert York (University
of Hawai'i at Manoa)
3) Vadim Akulenko (Far
Eastern Federal University)
4) Priscilla Kim (University
of Central Lancashire)

Commentators : 1) Prof. Shen Dingchang
(Peking University)
2) Prof. Park Tae Gyun
(Seoul National University)



シンポジウム

韓国研究センターは今年度、慶應義塾大学現代韓国研究センターと共同シンポジウム「2017年の日韓関係―課題と展望―」および啓明大学国際学研究所との共同シンポジウム「グローバルな視点から見るポスターレス時代の社会変動」を開催した。各シンポジウムの内容を紹介する。韓国研究センターはこれからも、学内外の研究者と共同で研究会や各種のワークショップの開催を通じて、日韓における韓国学研究的の学術交流を積極的に行っていく。

九州大学韓国研究センター・慶應義塾大学現代韓国研究センター共同シンポジウム 「2017年の日韓関係―課題と展望―」

日 時：2017年1月19日 14:00~17:30

場 所：九州大学・西新プラザ2階大会議室A

共 催：韓国国際交流財団

後 援：西日本新聞社

韓国研究センターは、慶應義塾大学韓国研究センターと共同で2017年1月19日（木）、シンポジウム「2017年の日韓関係―課題と展望―」を開催した。日韓関係の専門家をお招きし、複雑化する日韓関係の展望について議論を行った。第1セッションでは、司会・討論者として韓国研究センターからは波瀾剛准教授、崔慶原准教授、報告者として菊池勇次助教が参加し、加えて西日本新聞社の植田祐一氏をお招きして、日韓関係の持続的な発展に関して活発な議論が行われた。菊池勇次助教は、「韓国の対日外交において圧倒的重要性を獲得

している領土・歴史問題の比重をいかに下げるかが、持続発展可能な日韓関係を築く上で必須の課題であり、そのためには安全保障協力、日韓交流、経済関係等の強化を進めていかなければならない」と語った。西日

本新聞社の植田祐一記者は、日韓関係をめぐる報道の非対称性(引用報道や、極端にかたよった報道)を指摘し、日韓関係が持続的に発展するためには、慰安婦問題や異なる社会制度といった日韓間の懸案事項に対するお互いの理解を促進するとともに、情報の受け手がマスコミの情報の信ぴょう性と精度を判断する力を高めていく必要性を語った。波瀾剛准教授は、枠組みを設定した上での交流ではなく、日韓において交流を促せるような意識を成熟させる必要性を指摘した。崔准教授は、混迷する韓国の政局が続き状況の改善が望めない可能性が憂慮されるとしつつも、歴史問題と経済・安全保障協力は別途に対処していく必要性を指摘した。

第2セッションでは、東アジア安全保障と日韓協力を題し、新たな局面を見せる東アジアの安全保障関係について、日韓だけでなく日中韓のそれぞれの専門家から課題と展望について多角的な視点から。報告者として韓国研究センターの富樫あゆみ特任助教が参加し、中国の専門家である愛知県立大学から鈴木隆准教授、討論者として九州大学比較社会文化研究院から益尾知佐子准教授、慶應義塾大学の西野純也教授をお招きして開催した。富樫あゆみ特任助





教は、日米同盟および米韓同盟の質的变化にふれ、複雑化する北東アジア情勢のなかで日韓が共通の戦略的利益を共有することの重要性を指摘した。これに対して慶應義塾大学の西野教授からは、日韓が共有する戦略的利益とは何を意味し、東アジアの安定という側面において、日韓が望む秩序のあり方が共通しているのか質問がなされた。それに対し、富樫助教は、日韓の共有する利益は対北政策であり、日本は対中

戦略という意味から日米韓の連携を重視する一方、韓国にとっては日中の中でバランスをとることを望んでいるとの返答がなされた。続いて鈴木准教授は、日本の対中認識と中国の対日認識を比較し、特に、地域秩序への共同貢献に対する日中の認識の違いについて報告を行った。とともに、日韓は、米中のパワーゲームに翻弄されないためには、対米・対中関係の基本的な方向性のすり合わせを行う必要があることを指摘した。これを受けて益尾准教授は、中国は経済力をつかった外交を展開することが展望される一方、アジアインフラ投資銀行といった新たな枠組みにおいて自らの主権を譲歩するなど、中国政府内部での変化を注視する必要があると指摘した。

◆プログラム

14:00~14:15 開会の挨拶

中野等 (韓国研究センター長)

西野純也 (慶應義塾大学現代韓国研究センター長)

14:15~15:45

第1セッション「持続発展可能な日韓関係に向けて」

報告：菊池勇次 (韓国研究センター助教)

植田祐一 (西日本新聞社デスク)

討論：崔慶原 (韓国研究センター准教授)

司会・討論：波瀾剛 (韓国研究センター准教授)

15:45~16:00 休憩

16:00~17:30

第2セッション「東アジア安全保障と日韓協力」

報告：富樫あゆみ (韓国研究センター特任助教)

鈴木隆 (愛知県立大学外国語学部准教授)

討論：益尾知佐子 (比較社会文化研究院准教授)

司会・討論：西野純也 (慶應義塾大学現代韓国研究センター長)

17:30 閉会の辞

九州大学韓国研究センター・啓明大学校国際学研究所共同シンポジウム 「グローバルな視点から見るボーダーレス時代の社会変動」

日 程：2017年2月2日 10:00~17:30

場 所：九州大学伊都キャンパス ゲストハウス1階多目的ホール

本シンポジウムは、国境の壁が低くなった現代をボーダーレス時代と定義し、ボーダーレス時代に伴う各国の社会変動を比較・検討することで、これからの国際社会の変化を分析することを目的として開催された。

第1セッションにおいて、啓明大学日本学科の金明洙教授は、「植民地期における材朝日本人の信託会社経営—朝鮮土地信託会社の経営変動を中心に—」と題し、植民地期における在朝日本人による信託会社の経営実態を、韓国金融史の側面から明らかにする報告を行った。これに対して波瀾剛准教授(韓国研究センター)からは、1920年代における1928年の世界恐慌が発生した時期に在朝日本人が経営する信託会社はどのように対処していったのかについての質問があがった。啓明大学中国学科尹彰俊教授

農学者の道程—金三純博士と京城・東京・札幌、そして福岡—」と題する報告を行った。



また、第2セッションでは啓明大学から、ペルーおよびアメリカカリフォルニア州における移民社会と原住民運動によるボーダーレス社会運動の形成についての報告がなされた。朴鍾碩(九州大学アジア太平洋未来研究センター准教授)との間で、ボーダーレス社会運動をグローバル化との関連でどのように考えられるのか、またこのような原住民運動における道徳的正当性をどのように評価することができるのかについての質疑がなされた。

第3セッションでは、啓明大学日本語学科の修士および博士課程の学生が、日本語と韓国語におけるフォントイメージの比較について回帰分析の手法を用いて報告した。辻野裕紀准教授からは、データーの信頼度や研究の目的とデーターから得られた回答がかみ合っていない点などが指摘された。本学からは、地球社会統合学府の山口佑香さんが、「朝鮮通信使」が日韓の政府、行政、市民に認識され受容されてきた経緯について報告した。啓明大学の黄達起教授からは、韓国の視点に立った通信使研究の必要性についても言及があった。



の、「現代中国語新造語分析を通じた現代中国社会文化の研究」に対し、秋吉准准教授(言語文化文化研究院)は、新造語の分析にかかる方法論や研究の目的の指摘をおこなった。ついで永島広紀教授が「ある韓国女性

◆プログラム

10:00~10:40 開会式及び基調講演

10:00~10:10 開会式

司会：崔慶原（韓国研究センター准教授）

開会の辞：金承玟（啓明大学国際学研究所長）

歓迎の辞：中野等（韓国研究センター長）

10:10~10:40 基調講演

岩下明裕（アジア太平洋未来研究センター教授）

10 : 40~12 : 30

第1セッション 東アジアの(社会)変動

司 会 : 中野等 (韓国研究センター長)

報告1 : 金明洙 (啓明大学日本学科教授)

植民地期における材朝日本人の信託会社
経営—朝鮮土地信託会社の経営変動を中心—

報告2 : 尹彰俊 (啓明大学中国学科教授)

現代中国語新造語分析を通じた現代中国
社会文化の研究

報告3 : 永島広紀 (韓国研究副センター長)

ある韓国人女性農学者の道程—金三純博
士と京城・東京・札幌、そして福岡—

討 論 : 秋吉収 (言語文化研究院准教授)

波瀾剛 (韓国研究センター准教授)

黄達起 (啓明大学日本学科教授)

14 : 00~15 : 30

第2セッション 欧米の(社会)変動

司 会 : 金承玟 (啓明大学校ヨーロッパ学科教授)

報告1 : 朴允姪

(啓明大学スペイン語中南米学科教授)

ボーダーレス的社会運動の正と負 : ラテ
ン・アメリカ原住民運動を中心に

報告2 : 金楨圭 (啓明大学米国学科教授)

少数民族地域境界の変化 : カリフォルニ
アオレンジカウンティを中心に

討 論 : 朴鍾碩

(アジア太平洋未来研究センター准教授)

徐怜志

(啓明大学人文力量強化事業団研究教授)

15 : 40~17 : 00

第3セッション 大学院生セッション

司 会 : 李庸惠 (啓明大学校日本学科教授)

報告1 : 李敏圭 (啓明大学日本語学科修士課程)

日韓間 '日本語フォント'に対するイメ
ージ研究

報告2 : 黄秀智 (啓明大学日本語学科博士課程)

日韓外来語の語彙レベルの測定と比較分析

討 論 : 辻野裕紀

(言語文化研究院准教授)

報告3 : 山口祐香

(九州大学地球社会統合科学府修士課程)

日本における朝鮮通信使研究

討 論 : 黄達起 (啓明大学日本学科教授)



定例研究会

韓国研究センターは本年度6回にわたり、客員教授はもちろん、主に韓国から韓国学研究者を招へいし、研究会を行った。定例研究会の概要を紹介する。

●第71回定例研究会

日時：2016年6月14日 15:30~17:00

場所：韓国研究センター1階会議室

発表者：鄭鎮星

(韓国研究センター客員教授・ソウル大学
学校社会学科教授)

発表題目：「韓国社会における人権：変化の過程と
その要因」



●第72回定例研究会

日時：2016年7月25日 14:00~17:15

場所：韓国研究センター1階会議室

プログラム：

①発表者：金宣姫

(梨花女子大学校 梨花人文科学院
HK研究教授)

発表題目：「不慣れな鏡：日帝本強占期「京城」
を背景とした韓国映画の空間性と脱空
間性」



②発表者：韓仁慧

(梨花女子大学校 梨花人文科学院
HK研究教授)

発表題目：「植民地時代を素材にした韓国の現代
映画の地平とその意味」



●第73回定例研究会

日時：2016年9月6日 15:00~17:15

場所：JR博多シティ 9階 会議室2

発表者：鄭鎮星

(韓国研究センター客員教授・ソウル大
学社会学科教授)

発表題目：「Marriage migration in Korea」

コメンテーター：小川玲子

(地球社会統合科学府准教授)



鄭鎮星教授



小川玲子准教授

●第74回定例研究会

日 時 : 2016年10月18日 14:00~17:00

場 所 : 韓国研究センター1階会議室

プログラム :

①発表者 : 兪慧林

(ソウル大学校 韓国政治研究所研究員)

発表題目 : 「受恵国から供与国へ : 韓国型公的開発援助 (ODA) の過去、現在、未来」



②発表者 : 金泰敬

(ソウル大学校韓国政治研究所研究員)

発表題目 : 「北朝鮮プロパガンダの形成 : 1967年4.15文學創作團の結成を中心に」



●第75回定例研究会

日 時 : 2016年12月22日 15:30~16:30

場 所 : 韓国研究センター1階会議室

プログラム :

①発表者 : ジョン・ハヨン

(財団法人韓国議会発展研究会、慶熙大学国際学部教授)

発表題目 : 「トランプ新政権と日韓関係の展望」



②発表者 : 尹光一

(財団法人韓国議会発展研究会、淑明女子大学校政治外交学科教授)

発表題目 : 「韓国社会格差について」



●第76回定例研究会

日 時 : 2017年2月10日 15:00~17:00

場 所 : 韓国研究センター1階会議室

発表者 : 韓斗鳳

(韓国研究センター客員教授・高麗大学校食料資源経済学科教授)

発表題目 : 「Policy Impacts and Determinants of Food Loss and Waste in Korea」



アジア太平洋カレッジ

グローバル人材育成のための日韓米「国際体験型」共同教育プログラム

アジア太平洋カレッジは、本学と釜山大学校（韓国）、ハワイ州立大学（米国）が拠点大学となり、日韓米の学生が集まり、「協学」（協力して学ぶ）する場を提供している「国際体験型」共同教育プログラムである。2年を1クールとして、1年次には日本と韓国を往復して実施する「キャンパス日本」「キャンパス韓国」に参加し、翌年の2年次には、ハワイで実施される「キャンパスハワイ」に参加する。日韓米の学生が協力して学び合うことを通して、日韓及び東アジアに対する理解とグローバル視野を併せ持つ人材を育成することが、本プログラムの狙いである。



○キャンパス韓国・キャンパス日本

●夏季プログラム

日 時：2016年8月12日～26日

場 所：九州大学、西南学院大学、釜山大学校

●冬季プログラム

日 時：2017年2月14日～28日

場 所：九州大学、西南学院大学、ソウル大学校、延世大学校

夏季には、日本側（九州大学、西南学院大学、鹿児島大学）50名、韓国側（釜山大学校）50名の計100名の学生が2週間にわたり、釜山と福岡でプログラムに参加した。冬季には、日本側（九州大学、西南学院大学）20名、韓国側（ソウル大学校、延世大学校）20名の計40名の学生が2週間にわたり、

ソウルと福岡でプログラムに参加した。キャンパスを共有し、英語を共通言語とした特別講義、日韓混成グループでのディスカッション、フィールドワーク、文化体験、インターンシップなどを行った。特に福岡で実施したインターンシップでは、九州電力株式会社と住友商事九州株式会社、西日本電信電話株式会社（NTT西日本）、公益財団法人福岡観光コンベンションビューロー、日本通運株式会社、株式会社安川電機、RKB毎日放送株式会社を訪問し、事前に企業から与えられたテーマに基づいて、グループごとにプレゼンテーションを行った（各企業のプレゼンテーマは以下の表を参照）。地域の企業との連携を図り、地域をあげての人材育成に取り組んでいる。



◆インターンシッププレゼンテーション（キャンパス日本）

※参加前の2ヶ月間にわたりグループ調査・研究、プレゼンテーション準備

1. 住友商事九州株式会社
「東アジアをつなぐ新しいビジネスプラン」
2. 九州電力株式会社
「電力の小売全面自由化の中、お客さまから選ばれるためのこれまでにないサービスの提案」
3. 株式会社安川電機
「10年後の社会情勢を踏まえて、安川電機の新規事業を企画・提案する」
4. 西日本電信電話株式会社（NTT西日本）
「自国の教育について、ICTがどのように活用されているか」
5. 公益財団法人福岡観光コンベンションビューロー
「福岡のインバウンド推進のため、どのような取組みが効果的か」
「外国人観光客のおもてなし向上のため、福岡市はどのようなことに重点的に取り組むべきか」
6. RKB毎日放送株式会社
「日韓両国の若者がどうしても観たくなる、海峡をつなぐ魅力ある番組とは？—アジアの玄関口福岡民放の観点から」
7. 日本通運株式会社
「次世代の日韓シームレス物流を構築するためにどのような工夫が必要か」

○キャンパスハワイ

日 時：2016年8月9日～27日

場 所：ハワイ州立大学マノア校

昨年度のキャンパス韓国・キャンパス日本に参加した日韓の学生から20名を選抜して実施した。1年次のキャンパス韓国とキャンパス日本で、互いの相違点に気づき、理解を深めたことを土台に、2年次には日本でも韓国でもない第三の場所である米国のハワイで、日韓それぞれを相対化し、グローバル視点から日韓関係を捉え直す深化学習を行った。グローバル社会を舞台にした日韓の協力について英語で最終プレゼンテーション、現地企業でのビジネスワークショップを通じた日韓米3国の比較、ハワイ大生とパールハーバー見学を行った。特に英語アカデミックプレゼンテーションクラスでは、安全保障、経済、社会・文化、人の移動(移民)、環境の5つの

グループに分かれ、3週間にわたってグローバル社会を舞台にした協力の在り方について、ハワイ大学図書館を利用した英語文献中心の研究、ディスカッションを通して意見を発展させ、最終プレゼンテーションを行った。

（韓国研究センター准教授 崔慶原）



◆ビジネスワークショップ（キャンパスハワイ）

※参加前の2ヶ月間にわたりグループ調査・研究、プレゼンテーション準備

1. Honolulu Star Advertiser
Compare ICIJ (Compare International Consortium of Investigative Journalists) 's effort and Zuckerberg's opinion. Which do you think is more reasonable for contributing to solve problems of our society and common issues? First, examine each effort, merits and demerits. Second, suggest your opinion.
2. Hawaii Coffee Company
Investigate coffee market situation in your country and propose a marketing strategy
3. Roberts Hawaii
To create a tour for guests from your country including the routing of the tour, financial costs and expected revenue, and marketing/promotional plan for the tour.

アジア太平洋カレッジ

シンポジウム「グローバル人材へのファーストステップ」

日 時 : 2016年12月3日 13:00~16:30

場 所 : 九州大学伊都キャンパス稲盛ホール

2年を1クールとする本プログラムは、今年度に2クールを終了した。プログラムの中間評価を兼ねたシンポジウムを開催し、成果を検証するとともに、その成果を学生個人の日ごろの学習と長期留学にどのようにつなげていけるかについて発表と議論を行った。本プログラムの意義を「グローバル人材へのファーストステップ」として位置づけ、学生の更なる成長を促すために、プログラムの充実化に向けた多様な意見が提示された。



第1部：講演「協力して学ぶ：短期留学プログラムの意義」

文部科学省高等教育局高等教育企画課国際企画室長
岩淵秀樹氏

学生間の国際交流は、他国の学生から刺激を受け違いを学び合うことに意義があります。韓国の学生のグローバル志向や「自分磨き」は見習うべきものがある。短期留学プログラムに参加して韓国の学生と実際に話してみることで、意識の高さを実感出来るのではないのでしょうか。九州は玄界灘を挟んでア

ジアと向き合っている。今後も九州大学がアジアとの交流の中で存在感を示していくことを期待しています。

第2部：プログラム参加学生による成果報告

「ファーストステップとしての「協学」

九州大学法学部2年 荒岡草馬

外国の学生と「協力して学ぶ（協学）」ことができました。自分たちが考えていることとは、発想の段階から異なる意見をもらうことができ、刺激を受けました。また、キャンパスハワイでは、日韓の視点からだけではなく、第三の視点からの意見や考えが聞けてとても勉強になりました。国際的な活動を行う上でのファーストステップとして、この1・2年生向けのプログラムが重要だと思います。私たちは今、ファーストステップを踏み終え、長期留学を含め、様々な活動を行うセカンドステップへ踏み出しています。

「工学部学生が持つべきグローバルマインド」

釜山大学校電子工学科2年 李周恩

韓国と日本、米国の環境教育を比較するアカデミックプレゼンテーションを準備する過程で、工学を志す者の姿勢について考えました。工学者には地球全体の社会のために貢献すべき使命があります。その使命を担うためには、さまざまな社会・文化を知り、それぞれの社会が抱えているグローバルな課題について関心を持つ必要があると思います。私は電子工学を深く学ぶために日本の大学院に進学するつもりです。当初は単なる好奇心から参加したプログラムでしたが、自分の将来を設計する上で、一つのきっかけをくれました。

「海外学生との協働から学んだこと」

西南学院大学文学部2年 平野由夏

グループワークを通して語学力やプレゼンテーション、文献探しやコミュニケーション全てにおいて自分の足りない点を多く感じ、悔しく思い、もっと努力が必要だと痛感しました。将来、専門である英語を駆使して国と国をつなげる国際的な仕事をしたいと考えて、留学を視野に入れていた私ですが、グローバル課題に対する自分なりの視点も磨いていくことの重要性を強く意識するようになりました。交換留学では、ただ英語を学び、スキルを上げるだけでなく、グローバル課題にまで関心を広げて学びたいと思います。

「視点の変化と成長」

延世大学校UIC経済学科4年 朴主榮

私には思考の柔軟性が足りず、打破すべき点もある、ということを知りました。これまで韓国と日本、両国がwin-win戦略を追求することがお互いにとって最良の方法だと考えてきました。しかし、個人レベルでは、日本人との協働について一度も考えてみたことがなかったのです。しかし、キャンパスハワイで日本の友人、マイとシホと一緒に3週間にわたり、アカデミックプレゼンテーションを準備する中で、協働を直接体験し、私の中にあつた無意識的な偏見を打ち破ることができました。

閉会の辞

九州大学理事・副学長 丸野俊一

本日の話を聞いて、改めてアジア太平洋カレッジプログラムの意義を感じました。複雑な現代社会において、未踏の領域にどうやって立ち向かっていくかという能力が求められています。1、2年生の段階で、知識や経験を活かしてしなやかなマインドセットの出来る学生に育てていくことは非常に重要です。グローバル社会でプログラム参加学生がリーダーシップを発揮していくことを期待しています。(第1部と第2部での発表・発言から抜粋)

(韓国研究センター准教授 崔慶原)



対日理解促進交流プログラム KAKEHASHI Project

Tomodachi Kakehashi Inoue Program

対日理解促進交流プログラム（KAKEHASHI Project）は、国際社会における対日イメージ向上や日本への持続的な関心の増進を目的とした日本政府推進事業である。特に、トモダチカケハシイノウエプログラムは、日米協力に貢献した故ダニエル・イノウエ上院議員の功績を称え、日系アメリカ人の軌跡をたどり、日米の相互交流を推進することを目的としている。

韓国研究センターは、ハワイ州立大学マノア校・ヒロ校をカウンターパートとして本プログラムに参加した。本プログラムには学内から選抜された2年生から修士2年までの23名が参加し、故ダニエル・イノウエ上院議員の生涯やプレゼンテーション準備を含む4回にわたる事前学習を経て、3月1日から8日の6泊8日の日程で実施された。

本プログラムでは、パールハーバー、戦艦ミズーリといった歴史的要所の見学に加え、ヒロ福岡県人会やハワイ州立大学マノア校の学生との交流会が行われた。本学の学生は、日本の四季・ポップカル

チャー・福岡の紹介・日本の大学生の現状をテーマとする4グループに分かれ、ハワイ州立大学マノア校の約100名の学生を前にプレゼンテーションを行った。

プログラムの後半は、オアフ島からハワイ島へと場所を移して行われた。ハワイ島ヒロでは国立天文台ハワイ観測所を訪問し、同観測所の田中壺氏による講義が行われた。同じくハワイ島コナでは、日系1世である後藤潤氏の墓地や日系アメリカ人が経営するコナコーヒー農場を見学した。また、在ホノルル日系人向けラジオ局KZOO(ケイズー)に出演するなど、多彩な内容が盛り込まれた。

最終日、オアフ島ホノルルの日本文化センターにて開催された報告会には、三澤 康総領事夫妻やハワイ州知事夫人ドーン・アマゴ・イゲ氏が参加され、参加学生による本プログラムの成果と今後の目標についてのプレゼンテーションが行われた。

日系アメリカ人の軌跡をたどり、観光地ではないハワイを学ぶ、充実したプログラムとなった。



在ホノルル日本国総事館表敬訪問



ハワイ州立大学マノア校でのプレゼンテーション



日本文化センターにおける報告会



KZOO出演

【日程】

3月1日

8 : 26 到着 ホノルル空港

10 : 00~17 : 00

パールハーバー、戦艦ミズーリ、国立太平洋記念
墓地 訪問

3月2日

9 : 00~11 : 00

在ホノルル日本領事館 表敬訪問

12 : 00~14 : 00

ハワイ州立大学マノア校 歓迎会、学生交流、
キャンパスツアー

14 : 30~16 : 30

ビショップミュージアム 見学

3月3日

11 : 15~12 : 07 ハワイ島ヒロへ移動

14 : 15~15 : 30

ハワイ州立大学ヒロ校 歓迎会
キャンパスツアー

16 : 00~17 : 00

国立天文台ハワイ観測所 見学
田中壺 氏による講義

17 : 00~19 : 30

ヒロ福岡県人会との交流夕食会
学生によるプレゼンテーション

3月4日

9 : 00~17 : 00

レインボーフォールズ、アカツカオーキッドガー
デン、キラウエア国立公園 見学

3月5日

8 : 00~9 : 15 コナへ移動

9 : 15~12 : 00

ハマクア本願寺、日系人墓地 訪問

14 : 00~16 : 00 コナコーヒー農場 見学

3月6日

9 : 52~11 : 00

ホノルルハワイ州立大学マノア校へ移動

12 : 30~13 : 20

学生によるプレゼンテーション

Group1 : Taste of Japan

Group2 : Visual trip to Fukuoka

Group3 : Japanese Pop Culture

Group4 : A Day in the life of Japanese
University Student

14 : 00~15 : 00 日本文化センター 見学

15 : 00~16 : 30

学生による報告会

Group1 : Identity of Japanese American

Group2 : The importance of fairness

Group3 : How to make a good communication

Group4 : Japanese American who have
contributed to the relationship
between Japan and America

3月7日

11 : 57 出発 ホノルル空港

(8日) 17 : 50 到着 福岡空港

センターの活動

2016年

4月1日	永島広紀教授、冨樫あゆみ学術研究員（特任助教） 着任
4月12日	第7回研究戦略会議
4月19日	中野教授 センター長（2期目）に補職 永島教授 副センター長に補職
5月10日	鄭鎭星客員教授（ソウル大学社会学科教授） 着任
6月2日	韓国研究センター委員会
6月14日	第71回定例研究会
7月4日	第8回研究戦略会議
7月7日	アジア太平洋カレッジ運営委員会
7月8日	韓国研究センター委員会
7月19日	第9回研究戦略会議
7月20日	韓国研究センター委員会
7月25日	第72回定例研究会
7月27日	韓国国際交流財団 東京事務所 往訪（中野・永島・冨樫）
7月29日	韓国国際交流財団フェローシップ候補者選考委員会
8月9日	アジア太平洋カレッジ キャンパスハワイ（～8月28日）
8月12日	アジア太平洋カレッジ キャンパス日本・韓国（夏季）（～8月26日）
8月27日	韓国前近代史若手研究者セミナー開催（～8月30日） 於：宗像市グローバルアリーナ
9月8日	第73回定例研究会
9月23日	鄭鎭星客員教授 離任
9月29日	第10回研究戦略会議
9月30日	坂本彩乃事務補佐員 退職
10月7日	韓国国際交流財団東京事務所 往訪（中野・永島）
10月17日	第74回定例研究会
10月24日	アジア太平洋カレッジ運営委員会
11月1日	韓国研究センター委員会
11月7日	韓国研究センター委員会
11月29日	徐賢燮長崎県立大学名誉教授（元駐福岡大韓民国総領事）来訪
11月30日	東アジア日本研究者協議会・第1回国際学術大会 参加（～12月2日） 於：仁川・松島コンベンシア
12月3日	アジア太平洋カレッジシンポジウム「グローバル人材へのファーストステップ—短期留学プログラムへの期待と現状—」開催
12月5日	アジア太平洋カレッジ運営委員会
12月20日	韓斗鳳客員教授（高麗大学校 食料資源経済学科 教授） 着任
12月22日	第75回定例研究会

2017年

1月19日	シンポジウム「2017年の日韓関係―課題と展望―」開催
2月2日	シンポジウム「ボーダーレス時代の社会変動」開催
2月8日	韓国国際交流財団奨学生研究発表会
2月10日	第76回定例研究会
2月14日	アジア太平洋カレッジ キャンパス日本・韓国（冬季）（～2月28日）
3月1日	Tomodachi Kakehashi Inoueプログラム 派遣（～3月8日）
3月2日	韓斗鳳客員教授 離任
3月3日	韓国研究センター委員会
3月13日	アジア太平洋カレッジ運営委員会
3月17日	韓国研究センター委員会
3月28日	Tomodachi Kakehashi Inoueプログラム 受入